東京女学館史料編纂室報

Tokyo Jogakkan Archives Newsletter Vol.10

2016年2月発行 東京女学館 史料編纂室
〒150-0012 東京都渋谷区広尾3-7-16
TEL 03-3400-0861 FAX 03-3407-5995

第10号

学校史編纂事業を終えて、新しい史料編纂室の形を考える
――組織(校内)文書の移管と個人資料の収集を両立するトータル・アーカイブズ「+α」の形を目指して

平成27年3月、『東京女学館短期大学史 史料編』の刊行をもって、短期大学史編纂事業は完結いたしました。現在、史料編纂室は、その後片付けに追われております。編纂過程では様々な資料を収集しましたが、資料を活用するばかりで、十分に整理する時間を取ることができませんでした。そこで、収集した資料をあらためて精査し、再び編纂の機会がめぐってきた時に活用できるよう、体系的に整理をしている最中です。

しかし、その整理作業を終えた時、史料編纂室は一体どうするべきでしょうか。たいていの場合、学校経営者と編纂実務者では、次のように見解が分かれます。組織の存続を第一義とする学校経営者から見れば、一般的な成果を生み出さない史料編纂室は、学校組織への貢献がない部署といえます。文化的活動に深い理解を示す学校経営者がいれば、史料編纂室としては幸運ですが、資金的に余裕のない中小規模の学校であれば、史料編纂室の活動を打ち切ることも十分に考え得る事態でしょう。一方、編纂実務者は、十分な調査・研究活動なしに学校史を執筆できないことを、経験的に知っています。充実した学校史を制作するためには、日常的に資料の収集に努め、そのデータを分析し情報を整理しておくことが必要です。しかし、あくまでもこの業務は、編纂事業を進めるための準備作業であり、これ自体に一般性を持たせるのは大変難しいことです。編纂事業にはどうしても必要な作業ですが、すぐに役立ち、学校組織に貢献するものではありません。

史料編纂室を存続させるには、両者の認識の落差を埋めなければなりません。その方法は、二つあります。第一に、学校経営者に史料編纂室の意義を理解してもらうことです。しかし、それでは史料編纂室の存続を学校経営者の胸積もりに託すことになり、確実な方法とはいえません。第二に、もっと分かりやすい形で、学校組織への貢献を果たすことです。つまり、もっと学校の日常業務と密接に係わり、その中で存在感を示す必要があります。その有力な答えが、史料編纂室のトータル・アーカイブズ化です。そこで、以下、トータル・アーカイブズとは何か、なぜトータル・アーカイブズでなければならないのか、どのようにすればトータル・アーカイブズを運営できるのかという観点から、ご説明しましょう。

そもそもアーカイブズとは、母体となる組織の文書を移管し、評価･選別を加えた上で公開する文書館のような組織をいいます。ポイントは、組織から文書が自動的に「移管」されるのであり、アーカイブズが「収集」するのではありません。これまで史料編纂室は、こうした移管の仕組みを構築してきませんでした。それは、優れた室長がいて、あらゆる資料を収集してきたからです。しかし、あまりにも室長個人の力に頼り切ってきたために、その室長が学校を去った時、新たな資料が入らなくなりました。このように属人的な組織では、史料編纂室を永続的な存在にできません。学校史の編纂には、何よりもまず資料を確保することが重要であり、恒常的に新たな資料を受け入れる態勢作りが望まれます。そのためには、アーカイブズという形でなければなりません。

しかし、アーカイブズは組織の公的文書しか移管の対象としません。そのため、個人の文書や組織に関連する資料は、保存の対象からどうしても抜け落ちてしまいます。歴史の真実は、時に個人の文書の中に眠っています。公的な文書は、不都合な情報を隠すことがありますが、個人の文書を見ると、真実を生き生きと描写している例も多くあります。また、組織の作成・収受したものではない、外部の視点からの資料を収集しておくことも、編纂事業では欠かせない作業です。そこで、個人の文書や組織に関連する資料を収集する機能を、併せ持つ必要があります。このように、「移管」と「収集」の機能を両有するのがトータル・アーカイブズです。ただし、トータル・アーカイブズは、本来、編纂の役割を有しません。ただ資料を提供するための組織です。しかし、学校内で他に編纂を担う部署もないので、学校においてはトータル・アーカイブズ自身が編纂事業を担うべきでしょう。

史料編纂室のトータル・アーカイブズ化は、学校史編纂という特殊な事業以外にも、学校組織に貢献する可能性を広げます。学校組織の文書移管に関与するということは、学校組織の文書体系を理解し、時として文書管理に対する適切な助言・指導ができなければならないということでもあります。特に、教員と事務職員の区別が明瞭な学校組織では、その役割が重要になります。事務職員の文書は事務局長が統括します。しかし、教員の文書を誰が適切に管理できるでしょうか。文書管理に明るいトータル・アーカイブズは、その役割を補助的に果たすことができるはずです。教員の文書事務の効率化につながるだけでなく、移管を受ける側としても文書管理の状況を把握するメリットがあります。また、アーキビスト（アーカイブズの専門職員）としての調査・研究能力で、アーカイブズ資源の活用を促進することができます。具体的には、自校史教育、広報活動のための情報提供、校務に係る業界動向の調査、国等に対する報告書作成の支援、教員の研究・研修活動の支援が考えられます。アーカイブズとしての本務だけでなく、こうした補助的な役割を応用的に果たせる可能性を有することが、表題で「＋α」とした理由です。

ただし、これを担う人材の養成・採用・研修には、課題が残ります。日本では、アーキビストを養成するためのプログラムが、それほど多くありません。また、アーキビストの資質を認証する公的な資格制度もありません。そこで、トータル・アーカイブズ「＋α」を設立する場合には、歴史学・教育学・アーカイブズ学の知見を有する専門家を採用し、外部の資格試験や研修制度を利用した特別な研修プログラムを自前で整え、あとはOJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）によって資質を養っていくしかないのです。

以上のように、学校史編纂事業を終えた史料編纂室は、トータル・アーカイブズ「＋α」の形に生まれ変わるのが最も望ましいといえます。国立大学や幼小中高大院の完全一貫教育を実現する大規模校では､既にアーカイブズ組織が整えられつつありますが、初等・中等教育段階の学校単体でこうした組織がある事例は少ないでしょう。しかし、事務の効率化・自校史教育の充実など、学校経営に利する面が少なからずあることから、本校においてもこうした組織形態の採用を検討すべきです。折しも、平成27年12月21日に発表された中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」では、①専門性に基づくチーム体制の構築、②学校のマネジメント機能の強化、③教職員一人一人が力を発揮できる環境の整備が必要であると指摘しています。今日、学校組織の見直しは、社会的な要請です。トータル・アーカイブズ「＋α」の構想は、まさにその専門性を有効活用するための一手として考えるべきではないでしょうか。

（史料編纂室　濵田英毅）

企画展示の紹介

史料編纂室は、学校創設以来のあゆみを紹介する常設展示室を管理・運営するほか、中学・高等学校図書館の入口付近にある専用の陳列棚を利用し、企画展示を常時公開しております。

今年度の企画展示は、6月に制作いたしました。その内容を、実際の写真と共に、ご紹介しましょう。

「生徒作品および教材資料展」

— 戦前を中心とした東京女学館の教養文化 —
（開催期間：2015年6月～ 2016年5月予定）

総合解説

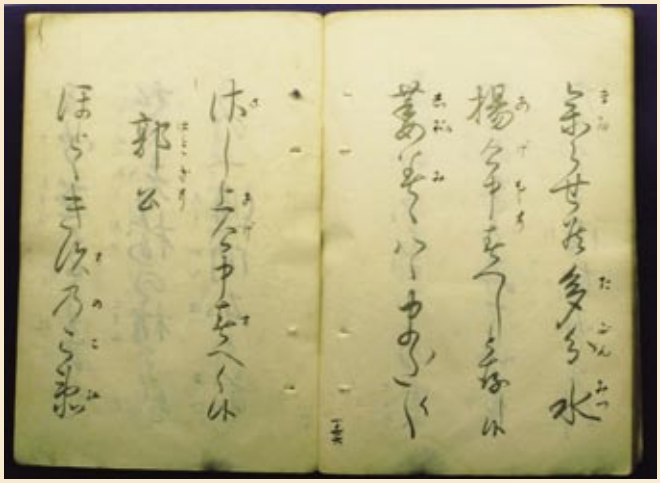
教養を測る尺度として、様々な素養を思い浮べることができます。豊かな学問知識はもちろんのこと、わきまえのある立ち居振る舞い、好印象を与えるコミュニケーション（会話・文字）、生活体験に根差した思想の涵養、芸術文化への深い造詣などです。

東京女学館は、「品性を養う」という教育理念を掲げ、教養教育に努めてきました。本校の独特な校風は、そうした教育実践を経て、歴史的に培われたものです。

今回、その原点である戦前期の教養教育を、「書道・国語・数学・美術」に関する生徒の作品と、教材資料から振り返ります。実物の資料をまのあたりに見ることによって、本校の教養教育の実態を感じ取っていただければ幸いです。

書　道

東京女学館の書風は、阪正臣の影響が強いといわれます。宮内省御歌所寄人や華族女学校教授として知られる阪は、本校の創立した明治21（1888）年から約五年間、書道を教えました。その後、書道教育は西田敬止や國分操子らが担いましたが、阪の編纂した教本を使用していました。また、本校では毎月、歌会が開かれていましたが、阪はその指導も担当していました。



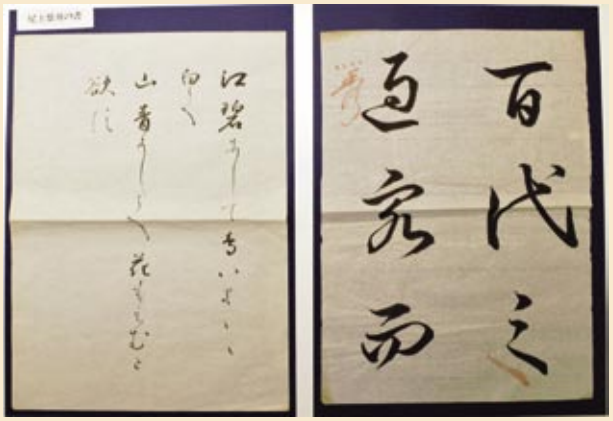
『ふみのやまくち』第一巻　明治28（1895）年9月

阪正臣が編纂した教本。東京女学館の幹事（副館長に相当する職）であった西田敬止が序文を寄せています。阪の手習いは、女子教育に適当な教材として、人気を博したといわれます。

戦後は、尾上紫舟が書道を教えました。尾上もまた、女子学習院教授を務め、帝国芸術院会員にも選ばれた一流の書家でした。このように、本校の書道教育は、当代一流の書家が支えていました。生徒の作品を見ると、どれも水準が高く、驚くばかりです。

昭和10（1935）年
卒業記念作品

朱字で
添削の入った
生徒の「詠草」



手習いに使われた尾上紫舟の書

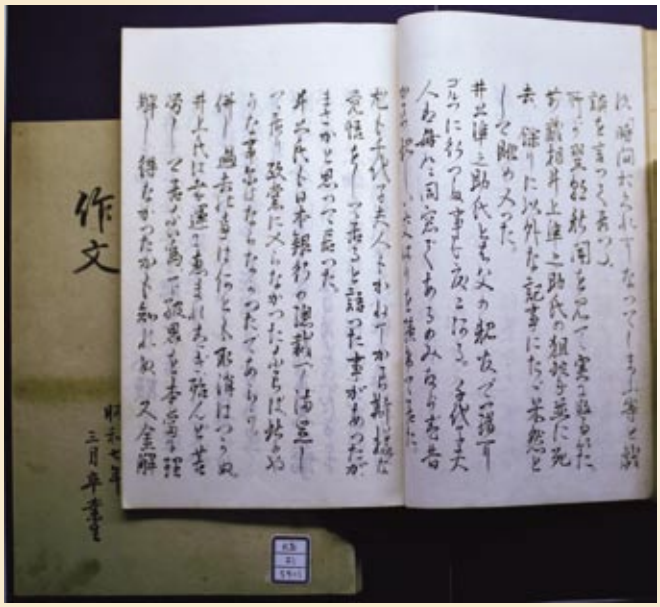
常設展示室にある、尾上紫舟のコーナー
（愛用のフロックコート、金縁メガネ、院展出品の書）

昨年度、ご遺族のご厚意により寄贈されました。尾上紫舟は、本校の「館歌」を作詞した人物でもあります。

国　語

大正時代から戦前期にかけて、生徒が卒業時に書いた作文集が残されています。その内容は、大きく二つの傾向に分けることが出来ます。五年間の学校生活を振り返るもの。そして、当時の時局を念頭におきながら、今後、実生活を送る上での抱負を語るものです。当初は和紙に毛筆で書いていましたが、次第に原稿用紙にペン書きと、記述の様式が変わっていきました。

特に注目すべきは、生徒の時局認識です。中上流家庭の子女が通った学校らしく、浅薄な理解ではありません。自身の境遇と重ね合わせ、深く考察しています。そこからは、いわゆるノーブレス・オブリージュの精神をも垣間見ることができます。なお、現在は、『菊』が生徒の作文集の役割を担っています。



昭和7（1932）年3月卒業生作文

ず「時間おくれになってしまふ等と戯談を言って居った。

所が翌朝新聞を見て実に驚いた。前蔵相井上準之助氏の狙撃並に死去。余りに以〔意〕外な記事にたゞ呆然として眺め入った。

井上準之助氏とは父の親友で一緒にゴルフに行った事も度々ある。千代子夫人は母と同窓であるのみならず昔から親しい交はりを続けて居た。

尤も千代子夫人もかねてから斯様な覚悟をして居ると語った事があったが、まさかと思って居った。

井上氏も日本銀行の総裁で満足して居り政党に入らなかったならば、此のやうな事にはならなかったであらう。

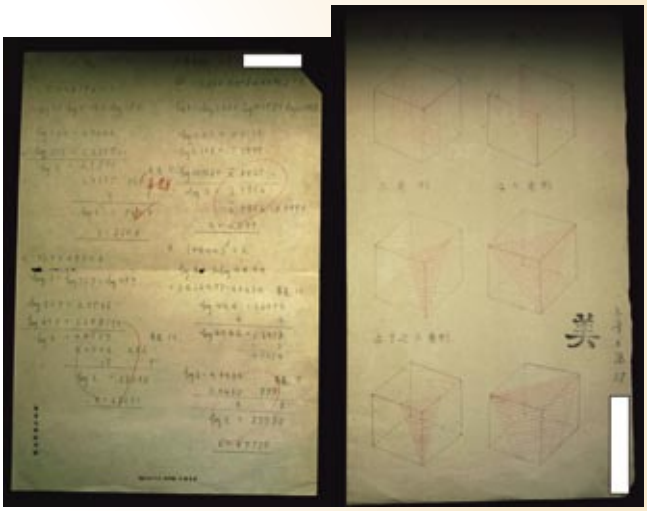
併し過去の事は何とも取消はつかぬ。井上氏は幸運に恵まれすぎ、ほとんど苦労して居ない為、下級界を本当に理解し得なかったかも知れぬ。又金解〔禁〕

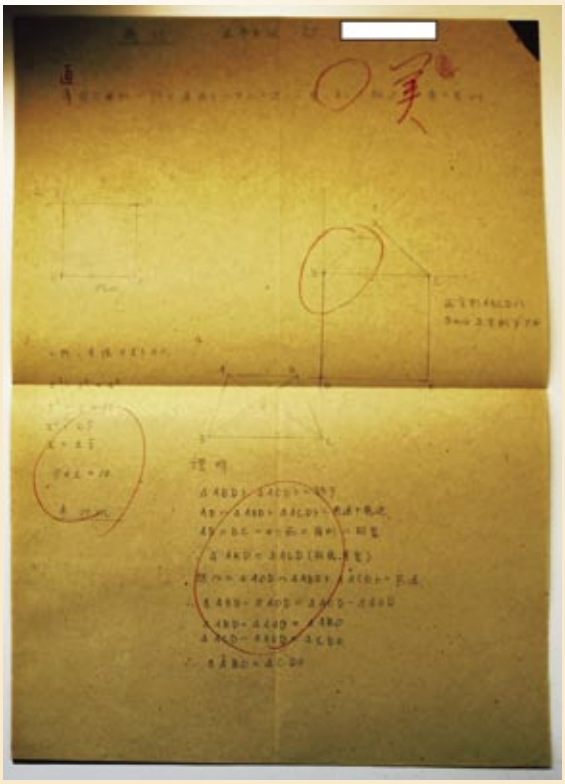
数　学

現在の算盤（そろばん）は、上に一玉、下に四玉です。これは昭和10（1935）年の文部省令による規格で、昭和13（1938）年に尋常小学校で算盤が必修化されたのを機に、全国へ広がったといわれます。

しかし、本校に残るこの算盤には、下に五玉あります。戦前は、江戸時代以来の伝統的な五玉で教える学校が多く、本校もそうした学校の一つであったことが分かります。

また、昭和18（1943）年に卒業した生徒が、在学中に受けた全ての試験問題を保存しており、そこから当時の数学の教育レベルを知ることができます。学校の歴史を振り返る上で、極めて貴重な歴史資料といえます。





美　術

教材として使用されたと思われる絵図

最上級の成績（甲上）をとった生徒作品

昭和13（1938）年卒業生の色紙

おわりに

生徒作品および教材資料展は、本校で初めての試みでした。ありのままの学校の姿を映し出すには、こうした資料が最適です。しかし、意識して収集しなければ、決して残らないものでもあります。

現在、本校に残っているのは、創立百周年を機に収集されたものです。ただし、戦後期のこうした資料は、創立百周年の時点では歴史資料として認識されなかったせいか、収集が進まず、本校にはほとんど残っていません。

そこで、今後は比較的新しい時代（戦後以降）の資料を、精力的に収集したいと考えています。今回の展示で、生徒作品や教材資料がいかに重要な資料となりうるか、お分かりいただけたら幸いです。